

やまなし

# 医療最前線

県立中央病院から

《 45 》

出生後、小さな命を守るために早急な対応が迫られる新生児の外科治療。総合周産期母子医療センターを備える県立中央病院は、産科、新生児科、新生児外科が連携し、出生前診断の発達に伴って増加する母体搬送にも対応。出産から新生児の手術まで新生児集中治療室（NICU）でスムーズに行う体制を整えている。

新生児外科副科長の矢知昇医師によると、同科への入院は年間約25件で、主な疾患は食道閉鎖、十二指腸閉鎖、小腸閉鎖、ヒルシスプルング病、鎖肛など。特に新生児外科など3科のチーム連携が必要な疾患の一つが先天性横隔膜ヘルニアだ。先天性横隔膜ヘルニアは、胸



昇科 矢知 昇  
大 矢知 昇  
新 生 児 外 科  
副 科 長

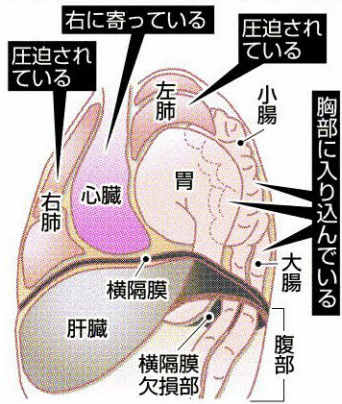
## 出生前から先天異常に対応

部と腹部を分けている横隔膜が生まれつき欠損し、穴が空いている病气。胎児期から胃や小腸、大腸、脾臓などの腹腔内の臓器が胸部に入り込んでしまう。このため、肺が圧迫されて十分に発達できず、生まれてから重い呼吸障害を起こすという。死亡率は約20%と新生児外科疾患の中でも高い。出生後、治療可能な施設に搬送するまでに呼吸困難で亡くなるケースが多く、妊娠中に超音波検査による出生前診断を行い、生まれる前に適切な施設に母体を搬送することが重要だ。

全国でも出生前診断の進歩に伴い、先天異常などのある胎児に対して出生直後から治療を開始できるよう準備が整えられるようになった。さらに手術器具の改良や麻酔の進歩などによって、新生児の手術後の死亡率は1968年の32%から2008年の7.5%まで低下している。

出生前診断の発達で、県立中央病院への母体搬送のケースも増加しているという。同病院では新生児外科など3科が連携して出産の方法やタイミングを検討。出生後の管理を行うとともに、赤ちゃんにとってよりよい状態で手術を行うタイミングも見極めていく。大矢知医師は「手術後も呼吸や循環状態を新生児科とともにサポートし、退院後のすこやかな成長につなげた」と話している。

### 先天性横隔膜ヘルニアの状態



第2、4木曜日に掲載します